

『命題論』 注解史の中のコプラと現実性

——ボエティウスからスコトゥスまで——

古 舘 恵 介

1 はじめに

中世後期の哲学者であるドゥンス・スコトゥスは、初期の著作と見られるアリストテレスの『命題論』の注解書である『命題論第二問題集』1巻5問において、「動詞 est は主語と述語の単なるコプラ（繫辞）であるか」という問題を立てている¹⁾。この問題に対する諸説の検討の後に示されるスコトゥス自身の解答の中心部分は次のとおりである。

この動詞 est は、第三のものを述語づけるとき、固有には、主語でもなく、主語の部分でもなく、述語でもなく、述語の部分でもない。そうではなく、述語が現実態に即して (secundum actum) 主語と同じであることを指示している²⁾。

すなわちスコトゥスによれば、ラテン語の be 動詞である est は、主

1) 批判校訂版全集の編者は、スコトゥスは当時の慣例に従ってその経歴の初期に一群の論理学関係の著作を書いたと推定している。『命題論』についての問題集は二冊あり、正確な書名は『命題論の第一巻に対する問題集』(*Quaestiones in primum librum Perihermeneias*)と『命題論の二つの巻に対する問題集』(*Quaestiones in duos libros Perihermeneias*)であるが、本稿では全集の収録順にそれぞれ『命題論第一問題集』『命題論第二問題集』と表記する。ただし全集の編者は、著作間の相互参照の状況から見て、『命題論第二問題集』のほうが先に書かれたと推定している。Ioannis Duns Scoti *Opera philosophica 2, Quaestiones in libros Perihermenias Aristotelis*, eds. R. Andrews et al., Franciscan Institute publications, 2004, pp. 33-34.

2) hoc verbum 'est' quando praedicat tertium, proprie nec est subiectum nec pars eius, nec praedicatum nec pars eius, sed denotat praedicatum esse idem subiecto secundum actum (n. 29). テキスト前注のものから、節番号のみを示す。

語でも述語でもない。このかぎりでは、動詞 est は「単なるコプラ」とも呼べるかもしれない。しかし結局スコトゥスは動詞 est を「単なるコプラ」とは呼ばなかった。それは恐らくスコトゥスが、動詞 est にも他の動詞と同じく、表示作用を認めていたからであろう。詳しくは5節で検討するが、スコトゥスはこの少し後でも「esse が ens の現実性を表示するということが知られなければならない」³⁾として、esse ないし est は現実性を表示するということを議論の前提にしているのである。

esse ないし est が現実性を表示するというこの見解は、スコトゥス研究としては、存在 (esse) は本質 (essentia) には含まれないという、アヴィセンナ以来の存在偶有性説の一つの現れとして考察することができる⁴⁾。

しかし本稿では歴史的な考察を試みたい。動詞 est が現実性 (actualitas) あるいは現実態 (actus) を表示するという見解は、スコトゥスに先立つトマス・アクィナスもすでに認めているが、『命題論』註解の歴史の初期には、動詞 est に表示作用があるということ自体、認められていなかった。すなわち、ボエティウスやアベラールは、コプラとして用いられた動詞 est は「何も表示しない」と解釈しているのである。

現代でも「現実性」(actuality) はときとして、「ある」(is) や「存在」(existence) や「実在性」(reality) と同義とされ、そのことの是非が様相論において議論されているのであるが⁵⁾、元来「現実態」(actus) や「現実性」(actualitas) という語は、アリストテレスの「エネルギー」の訳語としても使われたように、「(発動中の) 作用・働き」を表示する語であった。それが動詞 est の解釈に導入され、現代の「現

3) Aliud est intelligendum quod esse significat actualitatem entis (n. 31).

4) 例えばカエサルが現実にあること (Wirklichsein) あるいは存在することは、カエサルの本質には含まれず、それを表示するのは動詞 est である。二冊の『命題論問題集』における動詞 est の解釈と存在偶有性説との関係については、次の研究で論じられている。Jakob Hans Josef Schneider, 'Utrum haec sit vera: Caesar est homo, Caesar est animal, Caesare non existente. Zum *Peri-Hermeneias*-Kommentar des Johannes Duns Scotus', *John Duns Scotus: Metaphysics and Ethics*, eds. L. Honnefelder, R. Wood, M. Dreyer, Brill, 1996, pp. 393-412.

5) 例えば、現実ではない可能なものでも「ある」(there is, exist) と言えとするルイスの主張が大きな反響を呼んでいる。David Lewis, *On the Plurality of Worlds*, Blackwell Publishers, 1986.

実性」(actuality) に近づいていくまでの過程を、『命題論』 註解の歴史の中に見いだしていきたい。

2 ボエティウス

周知のとおり動詞 est には二つの用法がある。その第一は、例えば Socrates est (ソクラテスが存在する) という命題におけるように、それ自体が述語として用いられて「～が存在する」を表示する用法である。その第二は、例えば Socrates est albus (ソクラテスは白い) という命題などにおけるように、主語と述語を繋ぐ言葉、すなわちコブラとして用いられる用法である。この第二の用法における動詞 est を、アリストテレスは『命題論』において「(主語と述語に続いて) 第三に付加されるもの」(tertium adiacens, 19b19) と呼び、またそれに対応して後代には第一の用法での est も「第二に付加されるもの」(secundum adiacens) と呼ばれるようになった。しかしアリストテレスは、「第三に付加されるもの」としての est が、動詞として認定されうるのか、そうであるとすればそれは述語(「白い」など)といかなる関係にあるのか、そしてまた動詞 est がそれ自体として述語として用いられる第一の用法といかなる関係にあるのか、などを十分に説明していなかったため、これらの点について後代の註釈家たちが様々な解釈を提示したのである。そしてこの問題は、est そのものは何を表示するかという問題に集約されていったのである。

この問題に対して決定的な影響を与えたのが、ボエティウスのラテン訳『命題論』の次の箇所である。

また、あなたがこの純粋な est そのものを言っても、同様である(事物の esse や non esse のしるしではない)。est そのものは何ものでもないのである。しかし何らかの結合を併せ表示する⁶⁾。

6) *sed si est vel non est, nondum significat; neque enim esse signum est rei vel non esse, nec si hoc ipsum est purum dixeris. ipsum quidem nihil est, consignificat autem quandam compositionem. Aristotelis Liber ΠΕΡΙ ΕΡΜΗΝΕΙΑΣ, Anicii Manlii Severini Boetii Commentarii in Librum Aristotelis ΠΕΡΙ ΕΡΜΗΝΕΙΑΣ, ed. C. Meiser, Teubner, 1877, p. 5. οὐ γὰρ τὸ εἶναι ἢ μὴ εἶναι σημεῖόν ἐστι τοῦ πράγματος, οὐδ' ἐὰν τὸ ὄν εἴπῃς ψιλόν. αὐτὸ μὲν γὰρ οὐδέν ἐστιν, προσσημαίνει δὲ σύνθεσιν τινα. 16b22-24.*

ここに est と訳されている箇所は、アリストテレスのギリシア語では τὸ ὄν であり、文法的には be 動詞の現在分詞である。しかし恐らく、当時のラテン語では be 動詞の現在分詞は基本的に用いられていなかったこともあり、ボエティウスはこれを定動詞の est と訳した。このことによって、ラテン語圏の『命題論』註解書においては、Socrates est と Socrates est albus というそれぞれの命題に現れる est の表示作用の他に、単独で言われた est そのものの表示作用が考察されることになったのである。

ボエティウスは、自身のラテン訳に基づく『命題論第二註解』において、単独の est には表示作用が「ある」とも「ない」とも読める註解をほどこしている。しかし最終的には、est には表示作用は「ない」と解釈したか、あるいはあるとしても一般の動詞とは異なり、est は「真偽」や「質」（肯定・否定）のみを表示すると解釈したと思われる⁷⁾。上記の箇所に対する註解においてボエティウスは、ポルピュリオスの解釈を好意的に紹介しながら、次のように言う。

しかしポルピュリオスはこれとは（アレクサンドロスとは）異なる説明をしている。それは次のとおりである。この語すなわち est は、それ自体ではいかなる実体も表示せず、常に何らかの結合である。それが単純に付加されたときは、在る事物 (res quae sunt) の（結合であり）、また、分有に従うなら、他のものの（結合である）。例えば私が Socrates est と言うとき、私は、ソクラテスが在るもの (ea quae sunt) のうちの何かであると言っており、私は在る事物 (res hae quae sunt) とソクラテスを結びつけるのである。また私が Socrates philosophus est と言うとき、私はソクラテスが哲学を分有していると言っており、ここでも私はソクラテスと哲学を結合しているのである。これこそ私が、est はある種の結合の力 (vis) をもつのであって事物 (res) の力をもつのではないと言っていることである。しかし、たとえ (est が) 何らかの結合あるいは繋ぎ

7) 先行研究に従う。“I think he believes that ‘is’ signifies literally nothing in some cases.” Taki Suto, *Boethius on Mind, Grammar and Logic: A Study of Boethius’ Commentaries on Peri Hermeneias*, Brill, 2011, p. 210.

(copulatio) をもたらずとしても、それだけが言われると何も表示しない。以上のことを言わんとして彼（アリストテレス）は「もし純粋な est そのものを」、つまり est それだけを「言ったときもそうではない」と言っているのである⁸⁾。

このようにボエティウスは、① est が単独で言われた場合は「事物」(res) を表示する力をもたず、「結合」の力だけをもつとしている。そして est が文中で用いられたときも、② Socrates est という命題においては「ソクラテス」と「在る事物」との結合が表示されるとしており、③ Socrates philosophus est という命題においては「ソクラテス」と「哲学」との結合が表示されるとしている。つまり est 自体はやはり何も表示せずに「結合」の「力」(vis) をもつのみであって、その結合の相手として「在る事物」なり「哲学」なりを別に必要とするというのである。

3 アベラール

ボエティウスは単独の est が何も表示しないことを特に問題視している様子はない。しかし後のアベラールは、もし Socrates est albus のような命題における est が何も表示しないならば、それは si (もし) などと同じく動詞ではなく接続詞に含まれてしまうのではないかという点を問題視した。そしてアベラールはこの問題を解決するため、est を述語の部分とする独自の解釈に到達するのである⁹⁾。

8) Porphyrius vero aliam protulit expositionem, quae est huiusmodi: sermo hic, quem dicimus est, nullam per se substantiam monstrat, sed semper aliqua coniunctio est: vel earum rerum quae sunt, si simpliciter adponatur, vel alterius secundum participationem. nam cum dico Socrates est, hoc dico: Socrates aliquid eorum est quae sunt et in rebus his quae sunt Socratem iungo; sin vero dicam Socrates philosophus est, hoc inquam: Socrates philosophia participat. rursus hic quoque Socratem philosophiamque coniungo. ergo hoc est quod dico vim coniunctionis cuiusdam optinet, non rei. quod si compositionem aliquam copulationemque promittit, solum dictum nihil omnino significat. atque hoc est quod ait: nec si ipsum est purum dixeris id est solum. *In Librum Aristotelis ΠΕΡΙ ΕΡΜΗΝΕΙΑΣ Commentarii secunda editio*, ed. C. Meiser, Teubner, 1877, p. 77.

9) 述語の部分説について、特に次の二つの研究を参照した。Klaus Jacobi, 'Peter Abelard's Investigations into the Meaning and Functions of the Speech Sign 'est'', *The Logic of Being*, eds. S. Knuuttila, J. Hintikka, D. Reidel Publishing Company, 1986, pp. 145-180. 町田

アベラールもまた『命題論註解』において、アリストテレスの見解によれば単独で言われた est はすべての文がもっているような完全な意味をもたないと註釈している¹⁰⁾。しかし『ディアレクティカ』における、est についてのアベラール自身の見解はもう少し複雑である。そこでアベラールは単独ではなく命題中に現れる二用法の est の一つについては、表示作用を認めている。

アベラールは est の二用法の関係を説明しながら次のように言う。

命題の中に置かれた動詞は、ある場合は固有の仕方で、またある場合は付帯的な仕方で、述語づけられると言われる。固有には、例えば Petrus est や Petrus currit というかたちで述語づけられる。ここでは（動詞は）二つの力にかかわる。つまり、繋ぐ「機能」(officium) をもつのみならず、述語づけられた事物の表示作用 (significatio) をももつ。これに対して付帯的に、固有にではなく述語づけられると言われるのは、Petrus est homo のように、その述語との繋ぎにのみ割り当てられるときである¹¹⁾。

ボエティウスが est の二用法間の序列づけをせずに、単に二つの用法があるとしただけであるのに対し、ここでアベラールは二用法間に明確な序列を導入する。すなわち、Petrus est という用法での est が固有の用法であり、Petrus est homo という用法での est は付帯的な用法であ

—「時制と実在——アベラールの意味論とその限界——」中世哲学会『中世思想研究』第40号、1998年、84-93頁。

10) 「est はそれ自体では何ものでもない、と彼が言っているのは、それ自体で完結して言われた est は、すべての命題がもっているような意味をもたない、ということである。」Quod autem ait EST per se NIL ESSE, tale est, quod per se dictum perfectum non habet sensum, sicut omnis enuntiatio habet. Petri Abaelardi *Glossae super Peri hermeneias*, eds. K. Jacobi, C. Strub, Corpus Christianorum Continuatio Mediaevalis, 206, Brepols Publishers, 2010, p. 117.

11) verba in enuntiationibus posita modo proprie, modo per accidens praedicari dicuntur; proprie autem praedicantur hoc modo: 'Petrus est', 'Petrus currit'; hic enim gemina vi funguntur, cum non solum copulandi officium tenet, sed etiam rei praedicatae significationem habent. Per accidens autem et non proprie praedicari dicitur, cum ipsum praedicato ad eius tantum copulationem apponitur, ita: 'Petrus est homo'. Petrus Abaelardus, *Dialectica: First Complete Edition of the Parisian Manuscript*, ed. L. M. de Rijk, Van Gorcum, 1956, p. 134.

るというのである。このように序列を導入すると同時に、アベラールは固有用法での *est* には「事物の表示」があるとしている。そして *est* が何を表示するかをアベラールはこの少し先で説明し、「(*est* が) 固有に言われるときは、述語づけられる事物を含み、存在する事物 (*res existens*) のうちの何かを漠然と割り当てる。例えば次のように言われる場合、*Petrus est* と。これは『ペトルスが存在する事物のうちの何かである』ということである¹²⁾と述べる。つまり *Petrus est* という用法においては、*est* 自体が「存在する事物のうちの何か」を表示するというのである。これに対して *Petrus est homo* という用法における *est* は、表示作用をもたず、繋ぎという「機能」(*officium*) のみをもつとしているのである。

アベラールはこの、「繋ぎにのみ割り当てられる」付帯用法の *est* についてさらに分析を進め、ついに付帯用法の *est* は述語の部分として、いわば述語名詞を動詞化するために言われているという結論に到達するのである¹³⁾。この述語の部分説によって、あらゆる命題が「主語・動詞」というかたちをもつと解釈することができるようになったのである。

以上に示されたアベラール説の要点は、①固有用法における *est* は表示作用と繋ぐ機能の二つをもつことと、それが表示するものは「存在する事物」であること、②付帯用法における *est* は表示作用をもたないが繋ぐ機能をもち、その機能によって述語名詞をいわば動詞化するということ、この二つである。その後のトマスやスコトゥスがアベラールを直接に読んでいたかどうかは定かではないが、二人とも述語の部分説を意識した発言をしていることからして、アベラールの学説そのものは何らかのかたちで影響力をもっていたと思われる。

12) Cum autem proprie dicitur, rem etiam praedicatam continet atque aliquam rerum existentium indeterminate attribuit, veluti cum dicitur: '*Petrus est*', hoc est '*Petrus est aliqua de existentibus rebus*'. *ibid.*, p. 135.

13) 「*est homo*, *est opinabile*, *est album*, などは, *esse homo*, *esse opinabile*, *esse album* という一つの動詞として我々は理解しよう。」 '*est homo*' vel '*est opinabile*' vel '*est album*' pro uno verbo '*esse hominem*' vel '*esse album*' vel '*esse opinabile*' intelligamus. *ibid.*, p. 138. 「*esse* は述語の部分である。」 *immo pars est 'esse' praedicati. ibid.*, p. 138.

4 トマス

スコラ時代の盛期にいたって、以上のような状況は一変する。すなわち、est は単独で言われたときでさえも表示作用をもつとされるようになり、なおかつそれは「現実態」あるいは「現実性」を表示するとされるようになるのである。

トマスは『命題論註解』において、単独で言われた動詞 est について次のように述べる。

しかしアリストテレスは、この動詞 est は結合を併せ表示すると言っている。なぜなら、これは第一義的には結合を表示してはいないが、結果としては（第二義的には）表示しているからである。すなわち、est は知性のうちに無条件的に現実性として入ってくるものを第一に表示する。たしかに単独で言われた est は現実態においてあることを表示し、したがって動詞として表示している。ところでこの動詞 est が第一義的に表示するところの現実性は、あらゆる形相にとっての共通の現実性であり、実体的な現実態でもあるし付帯的な現実態でもあるので、いかなる形相や現実態であれそれが何らかの基体に現実的に内在していることを表示したいときに、我々はそれをこの動詞 est によって表示する。その際、無条件的に表示するのは現在時に即してであるが、ある意味では他の時間に即しても表示する。かくして、この est という動詞は、結果として結合を表示している¹⁴⁾。

14) Ideo autem dicit quod hoc verbum est consignificat compositionem, quia non eam principaliter significat, sed ex consequenti; significat enim primo illud quod cadit in intellectu per modum actualitatis absolute: nam est, simpliciter dictum, significat in actu esse; et ideo significat per modum verbi. Quia vero actualitas, quam principaliter significat hoc verbum est, est communiter actualitas omnis formae, vel actus substantialis vel accidentalis, inde est quod cum volumus significare quamcumque formam vel actum actualiter inesse alicui subiecto, significamus illud per hoc verbum est, vel simpliciter vel secundum quid: simpliciter quidem secundum praesens tempus; secundum quid autem secundum alia tempora. Et ideo ex consequenti hoc verbum est significat compositionem. *In Aristotelis Libros Peri Hermeneias et Posteriorum Analyticorum Expositio (In Peri Herm.)*, ed. R. M. Spiazzi, Marietti, 1955, 1, 5, 22, n. 73, 16b22-25.

ここにおいてトマスは、単独の *est* も現実性を表示するとしている。そして現実性を表示するがゆえに、動詞として表示しているという。つまり動詞の本質も、繋ぐ「力」や「機能」をもつことにではなく、現実性を表示することに求められるようになり、結合はその現実性の結果と見なされているのである¹⁵⁾。

ではこの動詞 *est* は実際の二用法においては何を表示することになるのか。このことについてトマスは別の箇所において次のように述べる。

動詞 *est* は、あるときは命題の中で単独で述語になる。例えば *Socrates est* など。我々がこれによって表示しようとしていることは、*Socrates est in rerum natura* (ソクラテスは実在する) である。しかしまたあるときは、主要述語として単独で述語にはならず、主要述語を主語に結びつけるために、その付帯物として述語になる。例えば *Socrates est albus* (ソクラテスは白い) など。このとき話者が意図していることは、*Socrates est in rerum natura* を主張することではなく、動詞 *est* を間に入れて白さをソクラテスに帰属させることである¹⁶⁾。

つまりトマスによれば、単独では「現実性」のみを表示する動詞 *est* は、主要述語としての用法においては、命題全体が「ソクラテスは実在する」を表示し、付帯物として述語になるとときには「結びつけるため」に言われるのである。そして先に引用した節を踏まえるなら、「実在する」や「白さ」などは、「現実的に」ソクラテスの中に内在しているということになるだろう。

15) ジルソンはこの単独の *est* が表示する「現実性」をただちに「存在」と解釈しているが、これには同意しない。Étienne Gilson, *Le Thomisme*, 6e éd., Vrin, 1965, pp. 184-185. 古館恵介「動詞と *actus*——トマス・アキナス『命題論註解』における *esse* 理解——」京大中世哲学研究会『中世哲学研究』第32号, 2013年。

16) *hoc verbum est quandoque in enunciatione praedicatur secundum se; ut cum dicitur, Socrates est; per quod nihil aliud intendimus significare, quam quod Socrates sit in rerum natura. Quandoque vero non praedicatur per se, quasi principale praedicatum, sed quasi coniunctum principali praedicato ad connectendum ipsum subiecto; sicut cum dicitur, Socrates est albus, non est intentio loquentis ut asserat Socratem esse in rerum natura, sed ut attribuat ei albedinem mediante hoc verbo, est. In Peri Herm., 2, 2, 2, n. 212, 19b19.*

かくして、トマスにとって動詞 *est* は「現実性」を表示するものであった。そして一般的に命題は述語となる形相あるいは現実態が基体に現実的に内在しているということを表示するものとされた。しかしこの「現実性」だけではまだ実際の二用法を説明するには十分ではなく、特に *Socrates est* の表示内容を説明するためにはまだ「実在する」(*in rerum natura*) という言葉を要したのである。そして動詞 *est* がそれぞれ「実在するということを表示する」や「白さを帰属させる」という説明は、ほとんどボエティウスやアベラールの説明と一致している。またトマスは述語の部分説に同意し、「(*est* は) 述語名詞と共に一つの述語をなしており、したがって命題は三つではなく二つの部分に分かれるのである」¹⁷⁾と述べている。

5 スコトゥス

スコトゥスもトマスと同一の解釈をとり、一般的に動詞が事物の表示と結合をもつことを認め¹⁸⁾、*est* も現実性を表示するということをも認める。もし相異があるとすれば、それはその同一の解釈を説明する言葉づかいにある。すなわち、スコトゥスは動詞 *est* の二用法を「現実性」によってのみ説明し、*Socrates est* の説明からも「実在する」(*in rerum natura*) という言葉を消去するのである。こうしてスコトゥスの「現実性」は、それ以前には「実在・事物」(*res*) と呼ばれていたものをいわば吸収することによって成立したのである。

スコトゥスは単独の *est* についてはあまり論じない。そのかわり『命題論第二問題集』1 卷 5 問の次の一節からは、不定法の *esse* が現実性を表示するがゆえに、そこから分化する二用法のいずれも何らかのかた

17) quae simul cum nomine praedicato facit unum praedicatum, ut sic enunciatio dividatur in duas partes et non in tres. *In Peri Herm.*, 2, 2, 2, n. 212, 19b19.

18) 「どの動詞も、二つのものを含意する。その一、精神によって把握される事物を表示するかぎりでの、本質的な動詞の概念に属する、動詞の事物を。その二、動詞であるかぎりでのそれに属する、結合を。」*Quodlibet enim verbum duo importat: rem verbi quae est de intellectu essentiali verbi in quantum significat rem quae concipitur a mente; et importat compositionem quae est ipsius in quantum verbum* (n. 23). 「しかし、動詞の中には二つのものがある。すなわち、動詞の事物と結合である。」*Sed in verbo sunt duo: res verbi et compositio* (n. 26).

ちで現実性を表示するという解釈が示されている。

他に, esse が ens の現実性を表示するということが知られなければならない (①)。そこで, 私たちが「これ」が現実態においてあるということを表示したいとき, 私たちは hoc est (これがある) という (②)。そして現実態は, 現実態が属しているものとの結合を作らないというこのことのゆえに, esse は, 自身へと付加されるものとの何らかの結合を作ることはない。なぜなら, 自身へと付加されるものは現実態に即して他のものと同じであるということ, 指示するから。したがって, *Homerus est poeta* (ホメロスは詩人である) とこのように言うことにおいて, *poeta* が自らの現実態に即して *Homerus* と同じであるということが表示される (③)。なぜなら, 事物どもの esse という性格と事物は, 結合を作らないからである。したがって, 述語は二つのものから結合されているとは理解されない, すなわち, 付加される物と esse という動詞とから¹⁹⁾。

この一節から, ① esse が現実性を表示することがわかる。そしてまた, ② *Socrates est* という命題が「ソクラテスが現実態においてある (esse actu) という事」を表示していることもわかる。少し後でもスコトゥスは, 「(est が) それ自体で (単独で, per se) 述語づけられるとき, esse の現実態が端的に述語づけられる」²⁰⁾と述べている。つまりトマスが「実在する」という言葉を用いて説明していたことがらを, スコトゥスは実在という言葉を用いずに単に「現実態にあること」と呼ぶ

19) Aliud est intelligendum quod esse significat actualitatem entis. Ideo cum volumus hoc significare esse actu, dicimus quod 'hoc est'. Et propter hoc quod actus non facit compositionem cum eo cuius est actus, ideo 'esse' non facit aliquam compositionem cum eo quod apponitur sibi; designat enim illud quod sibi apponitur esse idem alteri secundum actum. Ideo sic dicendo 'Homerus est poeta', significatur quod poeta secundum suum actum est idem Homero; quia ratio essendi rerum et res non faciunt compositionem. Unde non intelligitur praedicatum esse compositum ex duobus, scilicet ex apposito et verbo essendi (n. 31).

20) quando per se praedicatur, praedicatur actus essendi absolute (n. 33).

のである。そしてまたこの一節からは、③ *Socrates est albus* という命題が「白さが自らの現実態に即してソクラテスと同じであること」を表示していることもわかる。

以上のように、『命題論』註解の歴史において、動詞 *est* は、「何も表示せずに結合の力をもつもの」から、「現実性を表示するもの」へと変貌を遂げ、またその用法を説明する言葉づかいの中にかつて含まれていた「事物」という語も姿を消したのである。では「現実性」とは何か。そして *Socrates est* が表示するという「現実態においてあること」とは何か。そしてなぜ *Socrates est albus* は主語と述語が現実態に即して「同じであること」を表示するのか。スコトゥスの『命題論第二問題集』から、このことを説明することは困難である。なぜならスコトゥスは、*Socrates est* を説明するための言葉、例えばアベラールが「存在する事物」と呼んでいたものや、トマスが「実在する」と呼んでいたものを切り捨て、単に「現実態においてあるということを表示する」や「端的に *esse* の現実態が述語づけられる」としか言わないからである。また、*Socrates est albus* が主語と述語が現実態に即して「同じであること」を表示することの根拠は、恐らくは一般的に現実態は基体たる可能態と結合するという点にあると思われるが、現実態と可能態の関係は『命題論』の解釈に収まる問題ではないからである。

なお、スコトゥスは先の節の前の節で、現実態を説明して次のように言う。

このことのために、次のことが知らなければならない。すべての概念は、現実態という仕方に即して理解される。なぜなら、おのおののものは、現実態をもつことによって可知的となるのであり、おのおののものの現実態とは、それに即してその固有の性格が述語づけられるところのそれであるからである²¹⁾。

この一節に対する仏訳者の解説によれば、「ここでは『現実態に即し

21) *Ad quod sciendum quod omne intellectum intelligitur per modum actus, quia quodlibet est intelligibile ex hoc quod habet actum; actus autem uniuscuiusque est illud secundum quod praedicatur propria ratio eius (n. 30).*

て』は、『主語が存在していようとまいと、主語が何らかの可知的なものであるかぎり、その主語の現実態に即して』を表示している』²²⁾という。では「現実態」は「可知的であること」に尽きるのだろうか。しかし、このことはこの一節だけにもとづいて断定するべきではないだろう²³⁾。

6 文の成立と現実性

とはいえ、現代の様相論と『命題論』註解の歴史を比べると、動詞 *est* が表示する現実性あるいは現実態がもつ特徴を多少は示すことができる。現代の様相論においては、現実のことがらを表示する通常の文と、可能であるが現実ではないことがらを表示する反実仮想文が対比して分析されることが多い。そして実現していない単に「可能なもの」でも何らかの意味で「ある」と言えるのか否かがしばしば議論されている²⁴⁾。

中世のアベラールやスコトゥスも反実仮想的なことがらを考察している。アベラールはバラの個体が全滅した後に「バラ」という語は表示内容をもつかを論じているし²⁵⁾、スコトゥスは「カエサルが存在しないときに『カエサルは人間である』や『カエサルは動物である』という命題は真であるか」を論じている²⁶⁾。しかし彼らはこれらの議論において、「現実態」あるいは「現実性」という言葉をほとんど使わない。つまり彼らにとって反実仮想の問題は、「現実」と「可能」についての問題ではなかったのである。反対にまた動詞 *est* が現実性を表示するというトマスやスコトゥスの議論においても、その「現実性」は反実仮想との対比によって説明されてはいなかった。

動詞 *est* が表示するという「現実性」は、『命題論』註解の歴史の中

22) Jean Duns Scot, *Signification et vérité: Questions sur le traité Peri hermeneias d'Aristote*, Texts latins introduits, traduits et annotés par G. Sondag, Vrin, 2009, p. 45.

23) 注4であげた研究は、「この *est* は、結合あるいは分離を『現実』に理解する機能 („wirkliche“ Verstandesleistung) を意味している」としている。Schneider, op. cit., pp. 408-409. しかし「現実性」の表示が、つまるところ「『現実』に理解する機能」の表示であるという表現は、スコトゥスのテキストには見いだされない。

24) 注5参照。

25) *Die Logica ‚Ingredientibus‘*, Peter Abaelards Philosophische Schriften 1, ed. B. Geyer, Aschendorff, 1919, pp. 29-30.

26) *Quaestiones in primum librum Perihermeneias*, q. 7.

では、「結合の力」や「繋ぎの機能」にとってかわったものであった。これらの力や機能は、要するに文を文たらしめるものである。つまり、通常文であれ反実仮想文であれ、文には固有の特質があり、それは文ならぬ単語の連続（例えば「白いソクラテス」）や、あるいは何も言わないこととは区別される。この区別をもたらしめるものがかつては「結合の力」や「繋ぎの機能」と呼ばれ、事物や概念の表示とは別次元の扱いを受けていた。しかしトマスやスコトゥスはそれを「現実性」として概念化したのである。このことは、言語論にとって幸運なことであったとは限らない。つまり言語という極めて複雑な対象を分析するにあたり、概念とは別次元の考察の可能性が一つ失われたとも言えるわけである。

ではこのとき概念化されたものとはいったい何であろうか。手掛かりは、文と事物 (res) との関係である。スコトゥスは『命題論第二問題集』1 卷 3 問において、知性が主語と述語を結合して命題を形成する際は、知性は事物との同形性を認識するとしている²⁷⁾。またトマスもスコトゥスも、命題の真理の尺度は事物であるとしている²⁸⁾。すなわち、命題が成立したとき、それは必ず、話者の内面にとどまらない、外的な事物との対応をもち、それに従って真偽が定まるのである。『命題論』註解の歴史の中では、この、文と事物との対応そのものが、「現実性」として概念化され、同時に「現実性」のほうも、外的な事物の実在性に関係する語として理解されるようになったのであると、ひとまずは結論づけたい。

※本稿は 2017 年の中世哲学会第 66 回大会（岡山大学）での研究発表に基づくものである。

27) 「結合する知性は事物に対する自らの同形性を認識する。」Sed intellectus componens cognoscit illam conformitatem sui ad rem. *Quaestiones in duos libros Perihermeneias*, l. 1, q. 3, n. 10.

28) 「事物との一致に従って何かがある・あらぬが命題表明されていれば文は真であり、そうでなければ偽である。」Cum enim enunciatur aliquid esse vel non esse secundum congruentiam rei, est oratio vera; alioquin est oratio falsa. Thomas, *In Peri, Herm.*, 1, 9, 2, 110, 17a26-32. 「なぜなら真理は最後に表示されるもの、すなわち事物に従ってのみ判断されなければならないからである。」quia veritas non est iudicanda nisi penes ultima significata, quae sunt res. Scotus, *Quaestiones in primum librum Perihermeneias*, q. 2, n. 28.